

The 2000 International IRCOBI Conferenceに参加して

中平祐子

An Impression of the 2000 International IRCOBI Conference

Yuko Nakahira

1. はじめに

IRCOBI (International Research Council On the Biomechanics of Impact) は、衝突安全分野での主な国際会議の一つであり、欧州で年1回開催され、インパクトバイオメカニクス (衝撃生体力学) に関する発表が多く行われる。今回はその26回目で、9月20～22日にフランスのモンペリエで開かれた。モンペリエは、南フランス (地中海まで車で20分のところ) にある閑静な旧市街であり、市の中心部にある国際会議場LE CORUMでは、今回のような国際会議がよく催されるようである。今回の海外出張は、私にとって初めての海外旅行の上に一人旅であったため、不安と緊張で胸がいっぱいであったが、関係者のご指導のお陰で無事に発表を終えることができ、学ぶことも多かった。以下に、標記国際会議に参加した印象を紹介する。

2. The 2000 International IRCOBI Conference

2.1 研究発表

衝突安全分野は欧米がリードしているため、主な国際会議は欧米で開催される。今年の参加者は欧州、米

国、オーストラリア、インド、日本などから約220名であり、そのうち女性は2割を占めていた。学会参加者は、自動車メーカー、バイオメカニクス研究組織、部品メーカー、ダミーメーカーだけでなく政府関係者 (米国運輸省、米国陸軍、ヨーロッパの自動車安全基準を決める政府関係者、日本の運輸省など) も多い。彼ら政府関係者の目的は、自動車安全基準の規制の設定に有用な情報の収集である。研究発表や講演の他にポスター展示、製品紹介コーナーもあり、多くの情報が得られた。

今回の発表に関連する内容を1年前に国内で発表した。安全基準に関わる内容だったためか、その時の質疑応答はほとんど無いに等しかった。そこで今回の発表では議論できるような質問が出ることを望んでいた。予想通り、質疑時間だけでなく休憩時間やホテル内でも質問を受けたり、他の応用例を依頼されたりして、自分の研究に対する反応を肌で感じる事ができた。安全基準の設定に関わる私の発表には、米国自動車の安全基準の設定をする役割を持つアメリカ運輸省からの質問が多かった。厳しい質問もあったが、そのお陰で、次のステップのヒントが得られた。私の発表は、会議初日であった。初日の発表というものは、会場の雰囲気がつかめれないという欠点がある。しかし、顔や研究内容を知ってもらえる上に、その後の議論する時間が多いという利点の方が大きく感じられた。

2.2 イベント

IRCOBIではいくつかのイベントも用意されている。初日の会議後は歓迎レセプションが開かれた。会議場近くの小さなホールでの立食ワインパーティであった。学会事務局からのフランス語での長い挨拶を、司会のアメリカ人は困った顔で「She said "Thank you".」と訳し、会場を沸かせた。アットホームなパーティだったためか、普段はコンタクトしにくい所長や教授といった肩書きのある方や著名な方にも、比較的簡単に声をかける事ができた。



会場 (LE CORUM) 前の公園

二日目のConference Dinnerは、バスで1時間ほど離れた牧場で開かれた。夕闇迫る中、ミニ闘牛を観戦した。子牛が少年に突撃する瞬間、少年は高さ1m強の柵を越えて子牛の攻撃をひらりとかわし、そのたびに歓声が上がった。ときどき勢いあまって子牛も柵を越えてしまうこともあった。メインディッシュは牛の丸焼きというスペイン料理だった。食事中はスペインの歌と踊りが披露され、中には踊りだす人もいた。ある欧州人によると、昼食は2時間、夕食は夜通しかけていただくものである上に、食べることよりコミュニケーションの方が大切とされているようであった。それを裏付けるかのように、賑やかなディナーは夜中の12時過ぎまで続いた。「このデザート後に、またオードブルが出てきて、ずっと食事は続いていく。」とのジョークに「It's torture! (拷問ですね)」と返す一幕もあった。このときほど欧米人のスタミナの多さに感服したことはなかった。

イベントには奥様同伴の方も多かったが、日本人では唯一タカタ・アメリカ（シートベルトやエアバッグ等の製造会社）の樋口副社長が奥様と参加しておられただけだった。ここでも習慣の違いを感じた。

3. おわりに

衝突安全分野では、人の傷害を扱う特殊な実験においてはデータ数が少なく、計算モデルに役立つような人体の材料特性値の測定も少ないことから人体計算モデル開発も容易ではない。そのため、データひとつひとつを蓄積することで傷害メカニズムを明確化した

り、数少ない実験との合わせこみをしながら複雑な人体の計算モデルを作り上げたりすることを強いられる。つまり、現在行われている研究の成果が何十年後に世の中の安全の基盤となるような研究分野なのである。そのような分野の研究を何十年も続けている人が大勢いることに、彼らの正義感に支えられた強い信念を感じた。欧米にはそのような人が多いため、衝突安全の研究は、まだ当分の間、欧米がリードしていくと思われる。今回の海外出張を通じて、人の命を守る「安全」作りに関われることを誇らしく思った。

(2000年10月31日原稿受付)



Conference Dinner